

艶書

泉鏡太郎

青空文庫

「あゝもし、一寸。」

「は、私……でございますか。」

電車でんしゃを赤十字病院下せきじふじびやうゐんしたで下りて、向うへ大溝おほどぶについて、岬みさきなりに路みちを畝うねつて、あれから病院びやうゐんへ行くのに坂さかがある。あの坂さかの上り口の所で、上うへから来た男おとこが、上あがつて行く中年増ちゆうどしまなまめの媚めいかしいのゆきちがと行違ちがつて、上うへと下したへ五六歩ほはな離れた所ところで、男おとこが聲こゑを掛かけると、其そのの媚なまめかしいのは直すぐに聞取きくとつて、嬌娜しなやかに振返ふりかへつた。兩方りやうほうの間あひだには、袖そでを結むすんで絡まとひつくやうに、ほんのりと得え

ならぬ薫が漾ふ。……婦は、薄色縮緬の紋着の單羽織を、
 細り、瘦ぎすな撫肩にすらりと着た、肱に掛けて、濃い桔梗
 いろ、ふろしきづつみひと色の風呂敷包を一ツ持った。其の四ツの端を柔かに結んだ中
 から、大輪の杜若の花の覗くも風情で、緋牡丹も、白百合
 も、透きつる色を競うて映る。……盛花の籠らしい。いづれ病
 やうめん院へ見舞の品であらう。路をしたうて來た蝶は居ないが、誘
 ふ袂に色香が時めく。……
 軽い裾の、すらくと蹴出にかへると同じ色の洋傘を、日中、
 此の日の當るのに、翳しはしないで、片影を土手に従いて、し
 とくと手に取つたは、見るさへ帯腰も弱々しいので、坂
 道に得堪へぬらしい、なよくとした風情である。

「貴女、」

と呼んで、ト引返した、鳥打を被つた男は、高足駄で、杖を支いた妙な詠へ。路は恚う乾いたのに、其の爪皮の泥でも知れる、雨あがりの朝早く泥濘の中を出て來たらしい。……くもあつ雲の暑いのにカラ／＼歩行きで、些と汗ばんだ顔で居る。

「唐突にお呼び申して失禮ですが、」

「はい。」

と一文字の眉はきり／＼としながら、清しい目で優しく見越す。「此から何方へ行らつしやる? ……何、病院へお見舞のやうにお見受け申します。……失禮ですが、」

「え、然うなんでございます。」

此處で瞻つたのを、軽く見迎へて、一ツ莞爾して、

「否、お知己でも、お見知越のものでもありません。眞個

唯今行違ひましたばかり……ですから失禮なんですけれど

も。」

と云つて、ブツと寄つた。

「別に何でもありませんが、一寸御注意までに申さうと思つて、

今ね、貴女が行らつしやらうと云ふ病院の途中ですがね。」

「はあ、……」と、聞くのに氣の入つた婦の顔は、途中が不意に

川に成つたかと思ふ、涼しけれども五月半ばの太陽の下に、偶

と寂しい影が映した。

男は、自分の口から言出した事で、思ひも掛けぬ心配をさせ

るのを氣きの毒どくさうに、半なかば打消うちけす口吻くちぶりで、

「……餘あまり唐突だしぬけで、變へんにお思おもひでせう。何なにも御心ごしんぱい配はいな事ことぢや

ありません。」

「何なんでございませぬ、まあ、」と立たち停どまつて居ゐたのが、二ふたツばかり

薄彩うすさい色の裾すそ捌さばきで、手てにした籠かごの花はなの影かげが、袖そでから白しろい膚はだへ

颯さつと透すき通とほるかと思みえて、小戻こもとどりして、ト斜なめに向む合あふ。

「をかした奴やつが一人ひとり、此方こちら側がはの土堀どべいの前まへに、砂利じやりの上うへに踞しやがみま

してね、通とほるものを待まち構かまへて居ゐるんです。」

「え、をかした奴やつが、——待まち構かまへて——あをんなの婦をんなををですか。」

「否い、御婦人ごふじんに限かぎつた事ことはありますまいとも。……現げんに私わたくしが迷めい

惑くをしたんですから……誰だれだつて見境みさかひはないんでせう。其奴そいつ

が砂利を掴んで滅茶々々擲附けるんです。」

「可厭ですなえ。」

と口を結んで前途を見遣つた、眉が顰んで、婦は洋傘を持

直す。

「胸だの、腕だの、二ツ三ツは、危く頬邊を、」

と手を當てたが、近々で見合せた、麗な瞳の楯にも成れと

か。

二

「私は見舞に行つた歸途です。」

と男は口早に言ひ續けて、

「往には、何にも、そんな奴は居なかつたんです。尤も大勢人

とゞほ

通りがありましたから氣が附かなかつたかも知れませんが、還

最う病院の彼方かどを、此方へ曲ると、其奴の姿がぼつねん

として一ツ。其が、此の上の、ずんどの、だゞつ廣い昔の大手

前と云つた通へ、赫と日が當つて、恚うやつて蔭もない。」

と雲を仰ぐと、鳥を見るやうに婦も見上げた。

「泥濘を捏返したのが、其のまゝ乾び着いて、火の海の荒

磯と云つた處に、硫黄に腰を掛けて、暑苦しい黒い形で踞ん

で居るんですが。

何心なく、眩がつて、すツとぼく、御覽の通り高足駄

で歩行あるいて來くると、ばらりく、カチリてツちや砂利じやりを投なげてるのが、離はなれた所ところからも分わかりましたよ。

中途ちゆうとで落おちるのは、届とぎかないので。其その砂利じやりが、病びやう院あんの裏う門らもんの、あの日ひ中なかも陰氣いんきな、枯野かれのへ日ひが沈しづむと云いつた、寂さびしい赤あかい土堀どべいへ、トン……と……間あひを措おいては、トーンと當あたるんです。

何なんですかね、島流しまながしにでも逢あつて、心こころの遣場やりばのなさに、砂利じやりをつかんで海うみへ投なげ込んででも居あるやうな、心こころ細ほそい、可哀あはれな風ふうに見みえて、其それが病びやう院あんの土堀どべいを狙ねらつてるんですから、あゝ、氣きの毒どくだ。……

年とし紀しは少わかし……許いひな嫁なづけか、何なにか、身みに替かへて思おもふ人ひとでも、入に院ふあんして居あて、療治れうぢが届とぎかなかつた所ところから、無理むりとは知しつても、

世間には愚癡から起る、人怨み。よくある習で——醫師の手ぬかり、看護婦の不深切。何でも病院の越度と思つて、其が口惜しさに、もの狂はしく大な建ものを呪詛つて居るんだらう。

……

「わたしは然う思ひました。最うね、一目見て、其の男のいくらか氣が變だ、と云ふ事は、顔色で分りましたつけ。……目の縁が蒼くつて、色は赤ツ茶けたのに、厚い唇が乾いて、だらりと開いて、舌を出しさうに喘ぎく——下司な人相ですよ——髪の毛の長いのが、帽子の下から眉の上へ、ばさくに被さつて、そして目が血走つて居るんですから。……」

「矢張り、病院を怨んで居るんですかねえ、誰かが亡く成つ

てき、貴方。」

と見舞の途中で氣に成つてか、婦は恚う聞いて俯向いた。

「まあ、然うらしく思ふんです。」

「氣の毒ですわね。」

と顔を上げる。

「雖然、驚くぢやありませんか。突然、ばらくと擲附つた

んですからね。何をする……も何にもありはしない。狂人だつ

て事は初手から知れて居るんですから。

——頬邊は、可い鹽梅に掠つたばかりなんですけれども、

ぴしりく酷いのが來ましたよ。又うまいんだ、貴女、其の石を

投げる手際が。面啖つて、へどもどしながら、そんな中でも其

でも、何の拍子だか、髪の毛の長い工合と云ひ、股の締らないだら
 けた風が、朝鮮か支那の留學生か知ら。……おや、と思ふと、
 ばらくと又投附けながら、……

——畜生、畜生——と口惜しさうに喚く調子が、立派
 におなじせんぞに同一先祖らしい、お互の。」

とフト苦笑した。

「それから本音を吐きました。

——畜生、婦、畜生——

大變だ。色情狂。いや、婦に怨恨のある奴だ……

と……何しろ酷い目に逢つて遁げたんです。唯た今の事なんで
 す。

漸やっと此處こゝまで來きて、別べつに追掛おひかけては來きませんでした——袖そでなんか拂はらつて、飛とんだ目めに逢あふものだ、と然さう思おもひましてね、汗あせを拭ふいて、此この何なんです、坂さかを下おりようとすると、下したから、ぞろ／＼と十四五人にん、いろの袴はかまと、リボンで、一ひとくみ組總出そうでと云いつたららしい女ぢ學生よがくせい、十五六はたから二十そろぐらゐるのが揃そろつて來きました。……」

三

「其その中なかに、一ひとり人ひと、でつぶりと太ふとつた、肉にくづきの可いい、西洋人せいやうじんのお媼おばあさんの、黒くろい服ふくを裾長すそながに練ねるのが居ゐりました。何處どこか宗しうけ教うの學がく校かうらしい。

いまじぶん
今時分、こんな處へ、運動會ではありますまい。矢張り
見舞か、それとも死體を引取に行くか、どつち道、頼もしさう
なのは、其お媪さんの、晃乎と胸に架けた、金屬製の十字架で。

ずらりと女學生たちを従へて、頬と頤をだぶ／＼、白髪の
渦を巻かせて、恚う反身に出て來た所が、何ですかね私には、彼
處に居る、其の狂人を、救助船で濟度に顯れたやうに見えた
んです。

が、矢張り石を投げるか、何うか、頻に様子が見たく成つたも
んですからね。御苦勞様な坂の下口で暫時立つて居て、遣過
ごしたのを、後からついて上つて、其處へ立つて視めたもんです。

船ふねで行くやうに其その連中れんぢゆう、大手おほての眞中まんなかを洋傘かうもりの五色ごしきの波なみで通りとほました。

氣きがかりな雲くもは、其その黒い影かげで、晴せい天てんにむらくと湧わいたと

思おもふと、颯風はやてだ。貴女あなた。……誰だれもお媪ばあさんの御馬前ごばぜんに討死うちじにする

約束やくそくは豫かねて無ないらしい。我勝われがち、鳥とりが飛ぶやうに、ばらく散ち

ると、さすがは救世主キリストのお乳母うばさん、のさつと太陽ひの下したに一人堆ひとりだか

く黒い服くろで突立つつて、其その狂人きちがひと向合むきあつて屈かみましたつけが、

叶かなはなく成なつたと見みえて、根ねを抜ぬいてストンと貴女あなた、靴くつの裏うらを翻かへ

して遁にげた、遁にげると成なると疾はやい事こと………卷まき狩がりへ出でる猪いのしですな、

踏留ふみとまつた學生がくせいを突退つぎのけて、眞暗まつくら三寶さんぼうに眞先まつさきへ素飛すつとびま

した。

それは可笑をかしくらゐでした。が、狂人きちがひは、と見ると、もとの所ところへ、其そののまゝ踞しゃがみ込んで、遁にげたのが曲まがり角かどで二三人見返にんみかへつて見みえなくなる時分じぶんには、又また……カチリ、ばらく。寂然ひっそりした日ひ中なかの硫黄ゆわうヶ島しまに陰氣いんきな音響ひびき。

通りとほものでもするらしい、人足ひとあしが麻布あざぶの空そらまで途絶とだえて居ゐる

……

所ところへ、貴女あなたがおいでなすつたのに、恚かうしてお出合であひ申まをしたんです。

知りしもしないものが、突然とつぜんお驚おどろかせ申まをして、御迷ごめい惑わくの所ところはお許ゆるし下ください。

私わたしだつて、御覽ごらんの通とほり、別べつに怪我けがもせず無事ぶじなんですから、故わ

ぎく
 々お話しをする程でもないのかも知れませんが、でも、氣を付けて行らつしやる方が可からうと思つたからです。……失禮しましたね。」

と最う、氣咎めがするらしく、急に別構へに、鳥打に手を掛ける。

「何とも、御しんせつに……眞個に私、」
 と胴をゆらくと身動きしたが、端なき風情は見えず、人の情を汲入れた、優しい風采。

「貴方、何うしたら可いでせうね、私……」

「成りたけ遠く離れて、向う側をお通んなさい。何なら豫め其の用心で、丁ど恚うして人通りはなし——構はず駈出したら可

いでせう……」

「私わたし、駈かけられませんの。」

と心こゝろ細ほそさうに、なよやかな其その肩かたをみ見た。

「苦くるしくつて。」

「成なる程ほど、駈かけられますまいな。」

と帽ぼうの底ひをお壓おさへたまゝ云いつた。

「持もちものはおあんなさるし……では、恠かうなさると可いい。……日ひ當あたりに御難儀ごなんぎでも暫しばらく時こゝ此處こゝにおいでなすつて、二三人にん、誰だれか來くるのを待合まちあはせて、それとなく一いつしよ所しよに行いらしたたら可いいでせう。

……」

と云いひ掛かけて、極きはめて計略けいりやくの平へい凡ぼんなのに、我われながら男をとこは

氣の毒らしかつた。

「何だか、昔の道中に、山犬が出たと云う時のやうですが。」

「否、山犬ならまだしもでございます……そんな人……氣味の

悪い、私、何うしませう。」

と困じた状して、白い緒の駒下駄の、爪尖をコトくと刻む

洋傘の柄の尖が、震へるばかり、身うちに傳うて花も揺れる。

此の華奢なのを、あの唇の厚い、大なべろりとした口だと縦に

銜へて呑み兼ねまい。

「ですから、矢張り人通りをお待合はせなさるが可い。何、圖

々しく、私が、お送り申しませう、と云ひかねもませんが、

實は、然う云つた、狂人ですから、二人で連立つて參つたんぢ

や、尚ほ荒立てさせるやうなものですからね。……」

四

をんな ぶんべつ
 婦は分別に伏せた胸を、すつと伸ばす状に立直る。

「丁ど可い鹽梅に、貴下がお逢ひなさいましたやうな、大勢

の御婦人づれでも來合はせて下されば可うございますけれどもね

え……でないと……畜生……だの——阿魔——だのツて……

何ですか、婦に怨恨、」

と言ひかけて——最う足も背もずらして居る高足駄を——も

のを言ふ目で、密と引留めて、

「貴方、……然う仰有いましたんですねえ。」

「當推ですがね。」

「でも何だか、そんな口を利くやうですと。……あの、どんな、

一寸どんな風な男でせう？」

「然うですね、年少な田舎の大盡が、相場に掛つて失敗で

もしたか、婦に引掛つて酷く費消過ぎた……とでも云ふのかと

見える様子です。暑くるしいね、緋の、大島か何かでせう、襟

垢の着いた袷に、白縮緬の兵子帯を腸のやうに巻いて、近

頃誰も着て居ます、鐵無地の羽織を着て、此の温氣に、めりや

すの襯衣です。そして、大開けに成つた足に、ずぼんを穿いて、

薄い鶺鴒茶と云ふ絹の、手巾も念入な奴を、あぶらぎつた、

じとくくした首、玉突の給仕のネクタイと云ふ風に、ぶらりと
 結んで、表の摺切れた嵩高な下駄に、元げた紺足袋を穿いて居
 ます。」

「それはく……」

と軽く言ふ……：「瞼がふつくりと成つて、異つた意味の笑顔を見
 せた、と同時に著しく眉を寄せた。」

「そして、塀際に居ますですね……：「踞んで、」

「え、此方の。」

と横に杖で指した、男は又や、坂を下へ離れたのである。

「此方の。……」

と婦も見返つたま、坂を上へ、白い足袋の尖が、裾を洩れつ

つ、

「上り角から見えますか。」

「見えますとも、乾溝の背後がずらりと垣根で、半分折れた松の樹の大な根が這出して居ます。其前に、束ねた黒土から蒸氣の立つやうな形で居るんですよ。」

「可厭な、土蜘蛛見たやうな。」

と裳をすらりと駒下駄を踏代へて向直ると、半ば向うむきに、すつとした襟足で、毛筋の通つた水髪の鬢の艶と抜けさうな細い黄金脚の、浅黄の翡翠に照映えて尚ほ白い……横顔で見返つた。

「貴方、後生ですから。ねえ、後生ですから、其處に居て下

さいましよ、屹ぎつとよ……」

と一度ど見て、ちらりと瞳ひとみを反そらしたと思おもふと、身み輕がるにすらく
と出でた。上あり口ぐちの電でん信しんの柱はしらを楯たてに、肩かたを曲くつて、洋傘かうもりの手て
柱はしらに縋すがつて、頸うなじをしなやかに、柔やはらかな髻たほを落おして、……帯おびの模も樣やう
の颯さつと透すく……羽織はおりの腰こしを撓たわめながら、忙せさうに、且かつ凝ぢつと覗のぞい
たが、岬みさきにかくれて星ほしも知らぬ可お恐そろい海うみを窺うかがふ風情ふぜいに見みえた。
男をとこは立たつて動うごけなかつた。

と慌あわたしく肩かたを引ひくと、

「おゝ、可い厭やだ。」

と袖そでも裳もすそ、花はなの色いろが颯さつと白しらけた。ぶる／＼と震ふるへて、衝つと退さが
る。

「何うしました。」と男は戻つた。

「まあ……堪らない。貴方、此方を見て居ます……お日様に向いた所爲か、爛れて剥けたやうに眞赤に成つて……」

今さらの事ではない。

「勿論目も血走つて居ますから、」

と杖を扱ひながら、

「矢張り石を投げて居ましたか。」

「何ですか恚うやつて、」

と云つた時、其の洋傘を花籠の手に持添へて、トあらためて、眞白な腕を擧げた。

「石を投げるんでせうか、其が、あの此方を招くやうに見えたん

ですもの。何うしたら可いでせう。」
 と蓮葉はすはな手首てくびをつ淑つましげに、袖そでを投なげて袂たもとを掛かけると、手巾ハンケチ
 をはらりと取とる。……

五

をんなをんなかるといきき
 婦をんなは軽かるく吐いき息きして、

「止よませう……最もう私わたし、行いかないで置おきますわ。」と正しょう面めん
をとこに男をとこを見て、早はや坂さかの上うへを背せにしたのである。

「病びやう院いんへ、」

「はあ、」

「其奴は困りましたな。」

男は實際當惑したらしかつた。

「いや、其は私が弱りました。知らずにおいでなされば何の事はないものを。」

「あら、貴方、何の事はない……どころなもんですか。澤山で

すわ。私は最う……」

「否、雖然、不意だつたら、お遁げなすつても濟んだんでせう。お怪我ほどもなかつたんでせうのに。」

「随分でござんすのね。」

と皓齒が見えて、口許の婀娜たる微笑。……行かないと心が極まると、さらりと屈託の抜けた状で、

「前まへを通り抜ぬけるばかりで、身體からだが窘すくみます。歩行あるけなく成なつたところところ、つかま
所ところを、掴つかつたら何どうしませう……私わたし死しんで了しまひますよ……婦をんなは弱よわ

いものですねえ。」

と持もつた手ハンケチ巾うらすの裏透くちびるくばかり、唇くちびるを輕かろく壓おさへて伏目ふしめに成なつた
が、

「石いしを其處そこへ打うたれましたら、どんなでせう。電いなづまでも投附なげつけられ
るやうでせう。……最もう私わたし、此處こゝへ兵隊へいたいさんの行ぎやう列れつが來きて、
其その背後うしろから參まゐるのだつて可厭いやな事ことでございます——歸かへりますわ
。」

と更あらためて判然はつきり言いつた。

「しかし、折角せつかく、御遠方ごゑんぱうからぢやありませんか。」

「築地つきぢの方ほうから、……貴方あなたは？」

「……芝しばの方ほうへ、」

と云いつたが、何故なぜか、うろくと四邊あたりを見みた。

「同じ電車おんなでんしゃでござんすのね。」

「然さやう……」

と大おほきにためらふ體ていで、

「ですが、行いらつしやらないでも可いいんですか。お約やく束そくでもあ

つたんだと——何どうにか出で來きさうなものですがね、——又また不ふ思し議ぎ

に人ひと足あしが途と絶だえましたな。こんな事ことつてない筈はずです。」

雲くもは所ところ々／＼墨すみが染にんだ、日ひの照てりは又また赫かつと強つよい。が、何なんとなく

濕しめりを帶おびて重おもかつた。

「構かまひません、毎まい日のやうに參まゐるんですから……まあ、賑にぎやかな所ところですの……魔ま日びつて言いふんでせう、こんな事ことがあるものです。おや、尚なほ氣き味みが悪わるい、……さあ、參まゐりませう。」

とフト思おもひだしたやうに花はな籠かごを、卜ふ伏しめ目で見みた、頬ほに菖あや蒲まが影かげさすばかり。

「一ち寸よつと、お待まち下くださいましよ。……折せ角かく持もつて參まゐつたんですから、氣きばかり、記しる念しに。……」

で、男をとこは手てを出ださうとして、引ひ込こめた。——婦をんなが口くちで、其その風ふう呂ろ敷しきの桔き梗きやう色いろなのを解といたから。百ひゃく合ごは、薔ばら薇ゐは、撫な子でしこは露つゆも輝かくばかりに見みえたが、それよりも其その唇くちびるは、此この時とき、鐵か漿ねを含ふんだか、と影かげさして、言いはれぬ媚なまめかしいものであつた。

花片を憐るよ、蝶の翼で撫づるかど、はらくと絹の手巾、
 軽く拂つて、其の一輪の薔薇を抽くと、重いやうに手が撓つて、
 背を捻ぢさまに、衝と上へ、——坂の上へ、通りの端へ、——花
 の眞紅なのが、燃ゆる不知火、めらりと飛んで、其の荒海に漾
 ふ風情に、日向の大地に落ちたのである。
 菖蒲は取つて、足許に投げた、薄紫が足袋を染める。

「や、惜い、貴女。」

「否、志です……病人が夢に見てくれますでせう。……もし、

恐入りますが、」

花の、然うして、二本ばかり抽かれたあとを、男は籠のまゝ、
 撫子も、百合も胸に滿つるばかり預けられた。

其そのあひだ間に、風呂敷ふうろしきは、手て早はやくた疊たんでたもと袂たもとへ入れて、婦をんなはうしろ背後うしろのも
 のをさへぎ遮さへぎるやうに、洋傘かうもりをすつと翳かぎす。と此この影かげが、又また籠かごの花はなに
 薄うつついろり色いろを添そへつつ映うつる。……日ひを隔へだてたカアテンの裡うちなる白晝まひるに、
 花はな園そのの夢ゆめ見みる如ごとき、男をとこの顔かほを凝ぢつと見みて、
 「恐おそれい入いりました。何どうぞ此こ方うちへ。貴方あなた、御ご一いつ所しよに、後ご生しやうで
 すから。……背うしろ後うしろから追おつ掛かけて來くるやうで成ならないんですもの。」

六

「では、御ご一いつ所しよに。」

「まあ、嬉うれしい。」

と莞爾につこりして、風かぜに亂みだれる花片はなびらも、露つゆを散ちらさぬ身みづくろひ繕ひ。
 帯おびを壓おさへたパチン留どめを輕かるく一つトひとンと當あてた。

「あつ。」

と思おもはず……男をとこは驚おどろ駭きの目めを睜みはつた。……と其その帶おびに挟はさんで、
 胸むな先に乳ちちをおさへた美女たをやめの蕊しべかと見みえる……下くだメ《したじめ》
 のほのめく中なかに、状じやう袋ぶくろの端はしが見みえた、手紙てがみが一通つう。
 「あゝ……」と其その途端とたんに、婦をんなも心こゝろ附づいたらしく、其その手紙てがみに
 手てを掛かけて、

「……拾ひろつたんですよ。此この手紙てがみは、」

「え、」

と、聲こゑも出でないまで、舌したも乾かわいたか、息いきせはしく、男をとこは慌あわたゞしく、

懐中へ手を突込んだが、顔の色は血が褪せて颯と變つた。

「見せて下さい、一寸、何うぞ、一寸、何うぞ。」

「さあ〜。……」

と如何にも氣易く、わけの無ささうに、ハンケチを口に取しながら、指環の玉の光澤を添へて美しく手紙を抽いて渡す。

此の封は切れて居た。……

「あゝ、此だ。」

歩行いて居た足も留るまで、落膽氣落がしたらしい。

「難有かつた、難有かつた……よく、貴女、」

と、もの珍らしげに瞻つたのは、故と拾ふために、世に、此處に顯れた美しい人とも思つたらう。……

「よく、拾つて下さつた。」

「まあ、嬉しい事、」

と仇氣ないまで、婦もともに嬉々として、

「思ひ掛けなくおために成つて……一寸、嬉しい事よ私は。……」

……矢張何事も心は通じますのですわね。」と撫子を又路傍

へ。忘れて咲いたか、と小草にこぼれる。……

「何處でお拾ひ下さつた。」

「直き其處で。最う其處へ参りますわ、坂の下です。……今しが

た貴方にお目に掛ります、一寸前。何ですか、フツと打棄つ

て置けない氣がしましたから。……それも殿方のだと、何です

けれど、優しい御婦人のお書でしたから拾ひました。尤も、あの、

にせて殿方のてのやうに書いてはありますけれど、其は一目見れば分りますわ。」

と莞爾。で、斜めに見る……

男は悚然としたやうだつた。

「中を見やしませんか。」と聲が沈む。

「否。」

「大切な事なんですから。もしか御覽なすつたら、構ひません、

——言つて下さい、見たと、貴女、見たと……構はないから言つ

て下さい。」

と煩かしい顔をする。

「見ますもんですか。」と故とらしいが、つんとした、目許の他

は、尚ほ美しい。

「いや、此は悪かつた。まあ、更めて、更めて御禮を申します。

……實際、此の手紙を遺失したと氣が附かなかつた中に、貴女

の手から戻つたのは、何とも言ひやうのない幸福なんです。

……たとひ、恚して、貴女が拾つて下さるのが、丁と極つた運命

で、當人其を知つて居て、芝居をする氣で、唯遺失したと思ふ

だけの事をして見ろ、と言はれても、可厭です。金輪際出來ま

せん。

洒落に遺失したと思ふのさへ、其のくらゐなんですもの。實

際遺失して、遺失した、と知つて御覽なさい。

捜さう、尋ねようと思ふ前に、土堀に踞んで砂利所か、石

垣きでも引ひ抜ぬいて、四あ邊たり八は方つ投な附げけるかも分わからなかつたんです。

……

思おもつても悚ぞ然つとする。――

動どう悸きが分わかりませう、手ての震ふるへるのを御ご覽らんなさい、杖ステッキにも恥はづかし

い。

其それを――時と計けいの針はりがひと一つ打うつて、あとへ續つくほどの心しん配ぱいもさ

せないで、あつと思おもふと、直すぐに拾ひろつて置おいて下くだすつたのが分わかつた。

御ご恩おんを忘わすれない、實じつ際さい忘わすれませぬ。」

「まあ、そんなに御ご大たい切せつなものなんですか……」

「ですから、其それですから、失しつ禮れいだけれどもお聞きき申まをすんです。」

「だいぢやうぶ、なか
「大丈夫、中を見はしませんよ。」

とおびうす
と帯も薄くて樂なもの。……

七

「決して、」

またこゑちから
と又聲に力を入れた。男は立淀むまで歩行くのも遅く成つて、

あなた
「貴女をお疑ひ申すんぢやない。もとく封の切れて居る手紙で

すから、たとひ御覽に成つたにしろ、其を兎や角う言ふのぢやあ

りません。が、又それだと其のつもりで、どんなにしても、貴女

に、更めてお願ひ申さなければ成らない事もあるんですから。：

……」

「他言しては不可い、極の祕密に、と言ふやうな事なんですわね。」

と澄すまして言いふ。

益々忙ますくあせつて、

「ですから真個ほんとうの事を云いつて下ください、見たみなら見たみと、……頼たのむんですから。」

「否いへ、見みはいたしませんもの、ですがね。旗野はたのさん、」

と婦をんなは不意ふいに姓せいを呼よんだ。

「……………」

又またひやりとした、旗野はたのは、名なを禮吉れいきちと云いふ、美術學びじゆつがく校出かうし

ゆつしん 身の 蒔繪師まきゑしである。

あつけと 呆氣あまもに取られて瞻みまもるのを、優しい洋傘かうもりの影かげから、打傾うちかたむい

ながしめ て流眊ながしめで、

「お手紙てがみの上書うはがきで覚えおぼましたの……下郎げらうは口くちのさがないもんで すわね。」と又微笑またみせうす。

れいきち 禮吉れいきちは得えも言いはれず、苦しくるげな笑ゑみを浮うかべて、

ひとわる 「お人が悪わるいな。」

とあきらめたやうに言いつたが、又其處またそこどころでは無なささうな、

こゑあせ 聲こゑも つて、

ほんとう 「眞個ほんとうに言いつて下ください。唯今たゞいまも言いひましたやうに、遺失おとすのを、

なん 何だつてそんなに心配しんぱいします。たゞ人ひとに知しれるのが可恐おそろしいん

でせう。……何、私は構はない。私の身體は構はないが、もしか、
 世間に知れるやうな事があると、先方の人が大變なんです。
 恚うやつて、奴 尻が足駄を穿いて澁谷へ落ちたやうに、ふ
 らついで居るのも、詰り此手紙のためで、……其も中の文句の用
 ではありません——ふみがらの始末なんです。一體は、すぐに
 も焼いて了ふ筈なんですが、生憎、何處の停車場にも暖爐
 の無い時分、茶屋小屋の火鉢で香はすと、裂いた一端も焼切ら
 ないうちに、嗅ぎつけられて、怪しまれて、それが因で事の破滅
 に成りさうで、危険で不可い。自分の家で、と云へば猶更です
 ……書いてある事柄が事柄だけに、すぐにも燃えさしが火に
 成つて、天井裏に抜けさうで可恐い。隠して置くにも、何

の中なかも、どんな箱はこも安心あんしんならず……鎖じやうをさせば、此處こゝに大事だいじが藏しまつてあると吹ふい聴ちやうするも同一おなじに成なります。

昨日きのふの晩方ばんがた、受取うけとつてから以來いらい、此これを跡方あとかたもなしに形かたちを消け

すのに屈託くつたくして、昨夜ゆうべは一目ひとめも眠ねむりません。……此處こゝへ來きます

途中とちうでも、出だして手てに持もてば人ひとが見みる……袂たもとの中なかで兩手りやうてで裂さけ

ば、裂さけたのが一層いつそ、一ひと片ひらでも世間せけんへ散ちつて出でさうでせう。水みづ

へ流ながせば何處どこを潛くゞつて——池いけがあります——此この人ひとの住居すまひへ流ながれ

て出でて、中なかでも祕かくさなければ成ならないものものの目めに留とまりさうで身か

體からだが震ふるへる。

身みに附つけて居をれば遺失おとしさうだ、——と云いつて、袖そででも、袂たもとで

も、恚かう、うかくだと搦すられも仕兼しかねない。……

……其の憂慮きづかひさに、——懷中ふところで、確乎しつかりて手を掛けて居ゐただけに、御覽ごらんなさい。何なにかに氣きが紛まぎれて、ふと心こころをとられた一寸ちよいとい分の間まに、うつかり遺失おとしたぢやありませんか。

此これで思おもふと……石いしを投なげた狂人きちがひと云いふのも、女學生ぢよがくせいを連れつた黒い媪ばあさんの行ぎやう列れつも、獸けもののやうに、鳥とりのやうに、散ちつた、駈かけたと云いふ中うちに、其それが皆みな、此この手紙てがみを處置しよちするたための魔性ましやうの變化へんげかも知れないと思おもふんです。

いや、然さう云いふ間まもない、彼處あそこに立たつてる、貴女あなたとお話はなしをするうちは、實際じつさい、胴忘どうわすれに手紙てがみのことを忘わすれて居ゐました。……

貴女あなた……氣障きざはりでせうが、見惚みとれたらしい。さあ、慥かうまで恥はぢも外聞ぐわいぶんも忘わすれて、手てを下さげます……次第しだいによつては又打明またうちあけ

て、其の上そのうへに、あらためてお頼たのみ爲しやうもありませうから、なか
 の文句もんくを見たみなら見たみと云いつた聞きかして下ください。願ねがひます、嘆たんぐ
 願わんするから……」

「拜見はいけんしましたよ。」

とすつきり言いつた。

「えゝ！」

瞳ひとみも据すわらず、血ちの褪あせた男をとこの顔かほを、水すゐ晶しやうの溶とけたる如ごとき瞳ひとみ
 に艶つやを籠こめて凝ぢつと視みると、忘わすれた状さまに下したまぶち、然さり氣げなく密そと
 當あてた、手巾ハンケチに露つゆが掛かかつた。

「あゝ、先方さきの方がお羨うらやましい。そんなに御苦勞ごくろうなさるんですか。」
 「其そのひとが、飛とんだことに成なりますから。」

「だつて、何の企謀を遊ばすんではなし、主のある方だと云つて、たゞ夜半忍んでお逢ひなさいます、其のあの、垣根の隙間を密とお知らせだけの玉章なんですわ。——あゝ、此處でしたよ。」

男が呼吸を詰めた途端に、立留まつた坂の下り口。……病院

下の三ツ角は、遺失すくらゐか、路傍に手紙をのせて來ても、戀の宛名に届きさうな、塚、辻堂、賽の神、道陸神のあとらしい所である。

「此の溝石の上に、眞個に、其の美しい方が手でお置きなすつたやうに、容子よく、ちやんと乗つかつて居ましたよ。」

と言ふ。其處へ花籠から、一本百合がはらりと仰向けに溢れて落ちた……ちよろ／＼流れに影も宿る……百合はまた鹿の

子も、姫も、ばらくと續いて溢れた。

「あゝ、籠から……」

「構ふもんですか。」

と、撫子を一束抜いたが、籠を取つて、はたと溝の中に棄てると、軽く翡翠の影が翻つて落ちた。

「旗野さん、」

「……………」

「貴方の秘密が、私には知れなくても、お差支へのない事をお知らせ申しませうか、——餘り御心配なすつておいとしいんですもの。眞個に、殿方はお優しい。」

と聲を曇らす、空には樹の影が涼しかった。

「何うして、何うしてです。」

「あのね、見舞ひに行きますのは、私の主人……まあ、旦那な
んですよ。」

「如何にも。」

「斯う見舞の盛花を、貴方何だと思ひます——故とね——青
山の墓地へ行つて、方々の墓に手向けてあります、其中
から、成りたけ枯れて居ないのを選つて、拵へて來たんですもの、

……

あなた、此私の心が解つて……解つて？

解つて？……

そんなら、御安心なさいまし。」

と莞爾にっこりした。……

禮吉れいきちは悚然ぞつとしながら、其それでも青山あをやまの墓地ぼちの中なかを、青葉あをばが

くれに、花はなを摘つむ、手ての白しろさを思おもつた。……

時ときに可おそろし恐おそろしかつたのは、坂さかの上うへへ、あれなる狂人きちがひの顯あらはれた事こと

である。……

婦をんなが言いつた、土蜘蛛つちぐもの如ごとく、横這よこばひに、踞しゃがんだなりで、坂さかをず

るくと摺ずつては、摺ずつては來きて、所々ところ／＼、一本ひとつもと、一輪いちりん、

途とちう中ちゆうへ棄すてた、いろ／＼の花はなを取とつては嗅かぎ、嘗なめるやうに嗅かい

では、摺ずつては來き、摺ずつては來きた。

ふたり二人ふたりは急いそいで電車でんしゃに乗のつた。

が、此電車このでんしゃが、あの……車庫しゃこの處ところで、一寸ちよつと手間てまが取とれて、

やがて發^{はつ}車^{しや}して間^まもなく、二^にの橋^{はし}へ、横^{よこ}揺^ゆれに飛^とんで進^{しん}行^{かう}中^{ちゆう}。
 疾^{しつ}風^{ふう}の如^{ごと}く駈^かけて來^きた件^{くだん}の狂^{きちがひ}人^びが、脚^{あし}から宙^{ちゆう}で飛^{とび}乗^のらうとし
 た手^てが外^それると、づんと鳴^なつて、屋^や根^ねより高^{たか}く、火^{くわ}山^{ざん}の岩^{いは}の如^{ごと}
 く勿^は上^{ねあ}げられて、五^ご體^{たい}を碎^{くだ}いた。

飛^{とび}乗^のる瞬^{しゆん}間^{かん}に見^みた顔^{かほ}は、喘^{あへ}ぐ口^{くち}が海^{なまこ}鼠^こを銜^{ふく}んだやうであつ
 た。

其^{それ}も、此^この婦^{をんな}のため^にに氣^きが狂^{くる}つたものだと聞^きく。……薔^{ばら}薇^{はら}は、
 百^{ゆり}合^りは、ちらくくと、一^{いち}の橋^{はし}を——二^にの橋^{はし}を——三^{さん}の橋^{はし}を。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷十五」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日第1刷発行

1987（昭和62）年11月2日第3刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

艶書

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>